
幸せな独り暮らし

熊川修

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸せな独り暮らし

【コード】

N0093Y

【作者名】

熊川修

【あらすじ】

僕には大切な人がいる。彼女はいつも僕を見てくれていて。

僕がこの世に生まれてから、今日で二十と五年が経った。

お金持ちの子ではなかったし、勉強も運動も人並みだった。

だけど貧乏な家に生まれたわけでも、病気がちな身体でもなかった。

中学も高校も地元の普通高。周囲からの評判とやらは知らない。気にしたことが無かったから。

だけど世間一般からすれば、おそらく僕は『普通』の子どもだっただろう。

このあいだ上司の結婚式に参加したとき、周りからは「お前もそろそろ結婚したらどうだ」なんて言われて、少しだけ笑ってしまっ

た。

いまどきは晩婚化だって進んでるのに、何をそんなに焦る必要があるのか、と。

「いつまでも独り暮らしじゃ、家に帰っても寂しいだろう」「って、笑いながら社長さんが言ってたっけ。

知らないからそんなことが言えるんだね。

僕にはちゃんと、大切な人がいるのに。

だってほら。今もこうして、すぐ隣で僕を見てくれている。

僕の、一番大切に。
僕の、大好きな人。

この部屋で一緒に暮らしているのは誰にも言っていないから、知らなくても無理はないけど。

彼女は、とても素晴らしいんだ。

仕事で帰りが遅くなっても、先に布団に入ったりせず、この部屋ですっと僕の帰りを待っていてくれるんだ。

電話するのを忘れても、それを怒ったりせずに。

突然の出張が入って数日帰れなかったときだって、君は出て行くことなく、この部屋で待っていてくれたね。

いつだって僕を支えてくれて。

いつだって僕を見ていてくれる。

だったらそのまま、結婚してしまえばいいじゃないかという人もいるだろうけど。

僕は今のままでもいいと思ってる。

だって一番大切に、一番好きな人が、こうして隣にいてくれるんだから。

わざわざそんな手続きをしなかったって、いいじゃないか。

夫婦にならなくなったって、彼女と僕はつながっているんだから。

子どもの頃から、ずっと一緒にいたよね。

公園で、プールで、山で、森で、川で、海で。

僕の家で遊んだのも……ほとんど毎日がそうだった。数え切れないな。

初めて出会ったのは、いつだったかな。

なにせ毎日一緒だったからね。

思い出がありすぎて、思い出すのも大変だ。

ああそつだ。

最初に君と会ったのは、僕のお母さんが死んだ時だ。

僕はあの時、ただ泣いていて。

そんな僕を、君は励ましてくれたんだっただ。

涙を拭ってくれて。涙は止まらなかつたけど、嬉しかったんだよ。

その日からだね。僕達は毎日一緒にいるようになった。

君は少し恥ずかしがり屋で。

近所の子どもや大人達に会うと、いつも僕の後ろに隠れてしまってたよね。

あの時の僕は、子ども心に『お姫様を守る騎士』の気分だった。思い出すと恥ずかしいけどね。

それから、どれくらい経ったかな。

小学校になる時か。

同じ学校には通えなかったんだよね。あれは寂しくて、悲しかったな。

だけど君は、学校が終わるとすぐに僕に会いに来てくれたよね。同じ学校じゃないけど、一緒に帰る通学路。

うん。楽しかったし、幸せだった。

中学も高校も、同じ学校には通えなかったけど。それでも帰り道では、毎日僕に来てくれていた。

けど君の恥ずかしがり屋は治らなくて。

人とすれ違うときには、いつも僕の背中に隠れてたね。

実を言うと、小さかった頃と違って、あの時ちょっとドキドキしてたんだ。

いま思えば、恋の始まりってやつかな。

自分で言っても、ちょっと恥ずかしいね。

受験前も、毎日応援してくれたね。

つきつきりで勉強も見てくれたりして。

二人して頭を抱えたのも、今ではいい思い出だなあ。

それで無事に高校も卒業できて、僕は就職を機に家を出たんだ。あの時は突然だったから、きみを驚かせちゃったよね。ごめん。

だってお父さんってば、僕とたまに話をする時はいつも「かべにかべに」ってウルサイんだもの。

嫌になっちゃってさ。

それでこの部屋を借りて、独り暮らしを始めたんだった。

突然で、家出みたいで、なんの相談もしなかったのに、君は怒らず、僕について来てくれたよね。

いまさらだけど、本当にありがとう。

少しだけ不安だった独り暮らしも、君のおかげで寂しくなかったよ。

そのうち、君もこの部屋で暮らすようになって。

今こうして、僕達の思い出をパソコンに向かって打ち込んでいるところで、す、っと。

でもやっぱり、少しだけこの部屋はせまいよね。

パソコンデスクの右側、すぐ横が壁だもんね。

僕が今座っているイスと壁の間に、1センチの隙間もないっていうのは、家具の配置ミスかな。

何回ひじを打ちつけちゃったか、覚えてないや。はは。

でも僕はね、このせまさもいいかなって思ってるんだ。

だってほら。

こうしてパソコンに向かってるだけで、二人がくつつけるから。

うーん。やっぱり真顔で言つと恥ずかしいね。

もうこんな時間か。

そろそろ寝ようかな。

あくびをしてからパソコンの電源を落とす。

僕は右を向いて、彼女に「おやすみ」とつぶやいてから布団へと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0093y/>

幸せな独り暮らし

2011年10月29日02時12分発行